地域医療機関さまと亀田総合病院をつなぐ情報誌

かめだより

第74号
2021年10月発行

発行：医療法人鉄蕉会 亀田総合病院/地域医療支援部・地域医療連携室　〒296-8602 千葉県鴨川市東町929　TEL：04-7099-1261（内線7156）
発行責任者：亀田俊明　編集責任者：蔵本浩一

index

P2 … 特定行為看護師の活動について
（シリーズ２：PICC チームの活動報告と今後の展望）
地域医療連携と「NOBORI」の活用
（シリーズ２：「NOBORI」を活用した地域医療連携）
P3 … 地域医療連携室のご紹介
P4 … 地域医療機関さまより
P5 … 当院診療科より
P6 … コロナに負けるな！医療者のメンタルヘルス支援への取り組み
（第２回 職員の主体性をサポートする）
P7 … スタッフひろば
P8 … トピックス
勉強会情報

特定行為看護師の活動について

シリーズ2 「PICCチームの活動報告と今後の展望」

特定行為看護師 PICCチーム 八代大輔

1. PICCチームの活動内容

2020年10月、特定行為研修のPICC(末梢挿入型中心静脈カテーテル)挿入の区分を選択した看護師6名と放射線科の鈴木崇浩先生、血液腫瘍内科の田畑里佳子先生によるPICCチームが発足しました。

私たちは依頼があった患者さまへのPICC挿入以外に、PICC留置患者さまの定期回診(感染兆候の確認と早期発見、固定方法の見直し、PICC留置に伴う何か困ったことや不安がないかなど)や、PICC管理についての教育活動及び病棟看護師や医師からのコンサルテーションへの対応を実施しています。

PICCの対象となる患者さまは、頻回な採血や、長期の点滴を必要とされる方、末梢ルート確保が困難な方、終末期における緩和目的の方など様々です。「針を何度も刺される」ということは患者さまにとっては痛みを伴う行為であるため、PICC挿入により患者さまの苦痛を最小限に抑えられ、さらに挿入場所によりADLを拡大でき、患者さまに必要な高カロリー輸液や、高濃度薬液の投与などの治療をタイムリーに行えることができます。また、採血、点滴留置が困難症例においては、看護師の負担を軽減することにつながるのではないかと思っています。

2. PICCチームの実績

チーム発足時、PICC挿入依頼は月に5件程度でしたが、現在では月に約30～40件ほどに増えています。医師ではなく研修を受けて知識・技術を習得した看護師が行うこの特定行為には、行為のみではなく、患者さまが安全に安楽に処置を受けられるような声掛けや、体位の工夫、穿刺部位の選択、そして挿入後のケアや管理など看護師という専門職ならではのノウハウが生かされています。回診時には、患者さまより「もっと早く教えてもらえばよかった」「看護師さんに迷惑かけなくて済むから嬉しい」「次の入院の時もお願いしたい」など、嬉しい言葉もいただきます。また、看護師からも「挿入してもらってよかったです」「PICCの管理について教えてほしい」との言葉を聞きます。

3. PICCチームの今後の展望

今までPICC留置患者さまは少なかったため、管理することに慣れていない病棟も多く、管理についての問い合わせも多くいただきました。しかし、現在では着実にPICC留置患者さまは増えつつあり、それに伴いPICC管理をどの病棟でも同じように、安全に管理できるように看護師への教育にも力を入れています。

現在、特定行為研修2期生として、地域病院の看護師も受講しています。今後、地域の病院でのPICC活動のサポートや連携もできるように、活動の場を病院だけではなく地域に広げていき、患者さまの満足度の向上に貢献していきたいと考えています。

次回は、特定行為看護師による「創傷管理」について紹介します。

地域医療連携と「NOBORI」の活用

シリーズ2 ：「NOBORI」を活用した地域医療連携

鉄蕉会 情報管理本部 顧問 中後 淳

シリーズ1で患者さまカルテ「NOBORI(ノボリ)」の機能について紹介しました。「NOBORI」は自分の健康を自分で管理するための患者さま向けアプリですが、医療機関同士が患者さまの情報を共有するための地域医療連携用アプリとしての機能も備えています。

コロナ禍において、医療機関・医療従事者はその最前線で尽力しています。長期にわたって何度も緊急事態宣言が発令され、日々の生活に苦しんでいる方も大勢います。その中で在宅勤務や遠隔診療などITを駆使した新しい働き方・サービス、いわゆる新しい生活様式が広がりつつあります。

この視点から地域医療連携をみると、まだまだ改革・改善の余地が多くあります。住民の日々の健康を担うかかりつけ医と、専門の医療従事者・最新の医療機器を備えた高度急性期病院は役割が異なります。そして、患者の立場でみると、これらの医療機関が密に連携して、それぞれの地域でひとつの大きな医療機関のよう

亀田総合病院内各部署のご紹介

《地域医療連携室》

メディカルレポート
地域医療連携室のご紹介

地域医療連携室副室長　杉田登子

2003年がん診療連携拠点病院に指定され、院内にがん拠点推進センターが組織されて活動を開始しました。がん診療拠点病院の役割として、地域で「がんパス」を運用する必要がありました。亀田総合病院は、地域医療を支える、地域住民の皆様の健康を守るためにと一生懸命に医療活動に取り組んできたつもりでしたが、一人の患者さまを中心に据えたパス運用にあたっては、地域の先生方の協力なしには成り立ちません。地域医療連携室もない亀田総合病院で「がんパス」を運用してくださいという命に当時腫瘍内科に在籍していた、三河医師に白羽の矢が立ち、いつの間にか私も引き込まれ、事務局の唐鎌さんと正直「どうしようか」から始まったように記憶しています。自由で豊かな発想と行動力を持つ三河医師に素地を作ってもらい、2012年4月より地域医療支援部内に地域医療連携室として組織され、現在に至っています。地域医療連携室は、6名の事務職を中心に、他の職種は皆、兼務ではありますが、それぞれの専門職集団がバックアップしている体制です。地域医療支援部の皆さんの協力がなければ、機能できなかったように思います。6名の事務職が専任で地域医療連携室を守り、必要時必要な専門職がチームでいるからこそ、スムーズな患者さまの転院依頼や受け入れ、連携が行えていると思っています。

開始当時は、地域に開かれた病院としてどうあるべきかを模索しながら、地域の先生方のもとを訪問させていただいていたように記憶しています。訪問することで地域の皆様から学んだことや情報、私どもの思いを、2010年8月25日のA4判1枚ペラにまとめ「がん連携パスだより」に始まり、15号から「地域医療連携室だより」になり、45号から「かめだより」として地域の皆様にご協力をいただきながら、情報を発信してきました。また、地域を一緒に支えてくださっている先生方をはじめ職員の皆様との交流会も行ってきました。先生方の思いや亀田総合病院に対する期待とともに、亀田総合病院としてやらなければならないことは何かを教えていただき、少しでも応えられるように活動してきたつもりですが、正直まだまだ課題を抱え、とても軌道に乗ったとは言えず、道半ばです。そんな中でのCOVID-19感染対策のために、訪問もままならない状況になってしまいました。いろいろな意味で、COVID-19感染対策は、私たちに課題を与えてくれていると思います。これから先を検討するにあたって、ここで少し今までの活動を振り返ってみました。あわただしく始めた地域医療連携も、少しずつ形になり、色々な職種が一丸となって取り組んでいくことは、これからも変わりないと思っています。

世の中的にもCOVID-19感染対策で各種研修や学会などは軒並みWeb環境に置き換わる中、顔の見える関係作りも、一か所に集まるだけではない方法を模索中です。このようにつながり方も変わっていく中で、電子化もひと昔前に比べれば急速な発展を遂げており、セキュリティ管理も良くなってきています。電子カルテの共有ソフトも変わりました。その点も踏まえて、もっと気楽に亀田総合病院をご利用いただけるようにならないかということを合わせて検討しています。感染対策問題があっても、なくなったとしても関係は変わらず、医療連携の窓口として、皆様に育てていただけるよう努力していきたいと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

に機能することが大きな安心につながると思います。しかし実際の地域医療連携は、患者自身が紹介状などを受け取り、次の病院に持参するというアナログな方法から抜け出せていません（保険請求の診断書も同じです）。新しく紹介状を作成し、それを封筒に入れて患者自身が運ぶのは、時間と手間がかかりますし、安全性を考えてもあまり適切な方法ではありません。情報も限られていて不十分です。医療機関同士が必要十分な情報を安全に直接やりとりできれば、患者と医療機関の双方にメリットがでます。そしてこれは現在のIT技術を使えばさほど難しいことではありません。

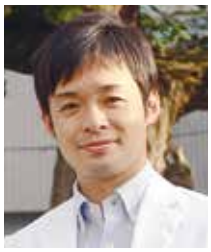
NOBORIを使った地域医療連携アプリは、この課題を解決するために導入しました。もちろん患者さまの大切な個人情報なので、患者さまの同意を得た上で、NOBORIの地域医療連携アプリを導入している医療機関同士で情報連携を行います。またNOBORIだけでなく医療機関同士でビデオ会議やチャット（LINEのようなイメージ）、ファイル共有などを行うしくみも既存のシステムで十分安全に行うことができるようになってきました。

亀田グループとしてはNOBORIアプリでの地域医療連携を広げつつ、医療機関同士の連携にIT技術を取り入れる取り組みを進めています。リハビリなどの回復期病院や介護施設なども含めた一連の医療サービスの提供が、異なる医療機関・介護事業者などの壁を越え、今まで以上に地域でひとつの大きな医療機関のように機能できれば、住民の健康を守る社会基盤として大きな価値を生み出すと思います。

地域医療機関さまより

赤門整形外科内科

副院長 宮川 慶



令和３年7月1日より赤門整形外科内科の副院長に就任いたしました宮川慶と申します。赤門整形外科内科は明治21年に初代 鈴木 勝太郎先生が現在の地に「赤門鈴木医院」を開業して以降、通称『赤門』として海の香るこの館山の地に存在してきました。地域のニーズに合わせて少しずつ形を変えてきた赤門ですが、現在は整形外科を中心とした救急医療、慢性期疾患の治療に加えて、各専門内科医による内科治療と幅広い疾患の診療にあたっています。まずは新参者であります私の自己紹介をいたします。

自己紹介

私は1982年に館山市で誕生し、順天堂大学医学部に進学しました。順天堂大学では「仁」の精神を学びました。「仁」とは、自分本位に行動するのではなく、常に他人の気持ちを思いやり、理解し、敬う心です。「人は誰かを助け、支えるために生まれ、生きていく」という考え方が、自分の成長にもつながると教えていただき、現在の私の根幹にその仁の精神は根付いています。順天堂大学を卒業し医師となり、内科・外科とローテーションをしながら研修をしていく中で、患者さんの「生活の質」に治療の重点を置く整形外科に大きな魅力を感じて整形外科医を志すことに決めました。順天堂大学整形外科学講座でローテーターとして、順天堂医院、千葉中央メディカルセンター、順天堂東京江東高齢者医療センターで整形外科医として学んでまいりました。来年で私も40歳、今が故郷に恩返しをするときだと思い、この度副院長に就任する運びとなりました。

赤門整形外科内科

赤門は「有床診療所」です。有床診療所とは19床以下の入院ベッドを有する診療所のことです。入院ベッドがあることで外来でも幅広い疾患の治療が可能になります。当院では入院が必要な救急患者さんの受け入れや手術治療、外来での保存療法と幅広い整形疾患の治療を行っています。また、高齢化が進む安房地域において、骨粗鬆症が引き金となった骨折が非常に多いことを危惧しており、骨粗鬆症治療も積極的に行っています。リハビリ室にも力を注いでいます。理学療法士、作業療法士併せて7名のスタッフを中心に入院・外来におけるリハビリテーションを行っています。曜日ごとに専門の異なった内科専門医が診療にあたっていることも当院の特徴のひとつです。外来で専門性の高い内科診療が可能となっているだけではなく、手術を受けられた入院患者さんも内科医の診察を受けることができるため、周術期合併症の低減につながっています。当院で行えない精密検査や専門的な治療が必要と判断した患者さんは亀田総合病院の先生方にご紹介させていただいており、このスムーズな医療連携によって我々赤門スタッフとしても安心して診療に従事できる環境となっています。

赤門には情熱に溢れた多くのスタッフがいます。私がスタッフを助け、スタッフに私が助けられる「仁」の関係を築いた先に、よりよい医療・介護があると考えています。「人は誰かを助け、支えるために生まれ、生きていく」、この「仁」の言葉を胸に、患者さんとスタッフの笑顔に溢れた赤門であるように皆さんと一緒に進んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

館山若潮マラソンにて

[Profile]

宮川慶

- 1982年4月29日館山市にて誕生
- 順天堂大学医学部卒
- 専門領域
  整形外科一般・脊椎脊髄疾患・骨粗鬆症
- 資格
  日本整形外科学会　整形外科専門医
  日本整形外科学会　脊椎脊髄病医
  日本脊椎脊髄病学会　脊椎脊髄指導医

当院診療科より

糖尿病内分泌内科
部長　三浦正樹

当科では、糖尿病など様々な生活習慣病を含む代謝性疾患とホルモンの異常などを伴う内分泌疾患を診療しています。糖尿病の教育入院では、糖尿病専門医、看護師、栄養士、薬剤師、運動療法士によるチーム医療を実践しております。また、バセドウ病、橋本病、甲状腺腫瘍などの甲状腺疾患に対して内分泌専門医、耳鼻咽喉科、病理科との連携を通じて診療しております。ホルモン分泌異常のある副腎疾患に対して内分泌専門医を中心とし、各種負荷試験、画像検査、シンチグラフィー検査、サンプリング検査などを用い適切に加療しております。

当科は南房総の糖尿病・内分泌診療における基幹施設の役割を担っており、外来治療困難な患者さまを受け入れております。現在の常勤医師は6名であり、更に2021年10月から順天堂大学浦安病院より後期研修医を通年受け入れる予定です。地域の需要に応えるためにさらに非常勤医師2名を採用しており、外来診療は平日3～4枠、土曜日は隔週2枠にて診療に携わっております。来年度以降も当科に従事希望の医師がおり、増員予定となっております。引き続きスタッフ募集しておりますので、研修希望の先生方は気軽にご連絡頂けますと幸いです。

さらに、地域医療連携を重視しており、近隣のご開業されている先生方、地域中核病院の先生方と連携を密にし、南房総地域の医療レベル維持・向上に寄与できればと考えております。現時点において各診療機関の先生方より多数のご紹介を頂き非常に感謝しております。以下に、紹介される頻度の高い患者さまの特徴を列挙致します。

代謝異常

- 健康診断で、血糖値が高い、コレステロールが高いといわれてきた
- 口が渇いて尿もたくさんでる。体重減少してきて糖尿病かもしれないと思った
- 家族に糖尿病患者がいて自分も心配
- 経口薬で治療していてもなかなか血糖値が下がらない
- 手術をしようと思ったら血糖値が高い
- FGM/CGMを用いて24時間の血糖値推移を確認したい
- インスリンポンプを導入してみたい
- 妊娠糖尿病があり診察してほしい
- ステロイド使用にて血糖値があがり診察希望あり

甲状腺疾患

- 健康診断で甲状腺が腫れているといわれた
- 動悸、不眠、手の震えなどがあって心配になってきた
- むくみ、寒がり、体重増加、コレステロールが高いと言われてきた
- 胸部CT検査で甲状腺に腫瘍がある
- 血液検査で甲状腺ホルモン異常がある
- 都内の病院が遠方で通えないため受診したい

下垂体疾患

- 血液検査で早朝安静空腹時ACTH、コルチゾールの異常がある
- 疲れやすい、倦怠感がある
- 多尿があり体重が減少してきた

副腎疾患

- 腹部CTで偶然副腎が腫れている
- 降圧剤を使用しても血圧が下がらない
- 肥満があり、早朝安静空腹時コルチゾール値が高い

このような悩み、不安を感じている患者さまがいましたら是非ご紹介ください。適切な原因の究明、病態に即した治療にて介入していきたいと考えております。病状安定しましたら、再度かかりつけの先生方にフォローアップをお願いしたいと存じます。診察をご希望の場合は亀田クリニック予約センターを通し、予約を取得して頂けますと幸いです。

コロナ禍にて先生方のご負担も増大されていると思われます。今後も医療連携を通して共に乗り越えていければと考えておりますので今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

コロナに負けるな！
医療者のメンタルヘルス支援への取り組み

第２回

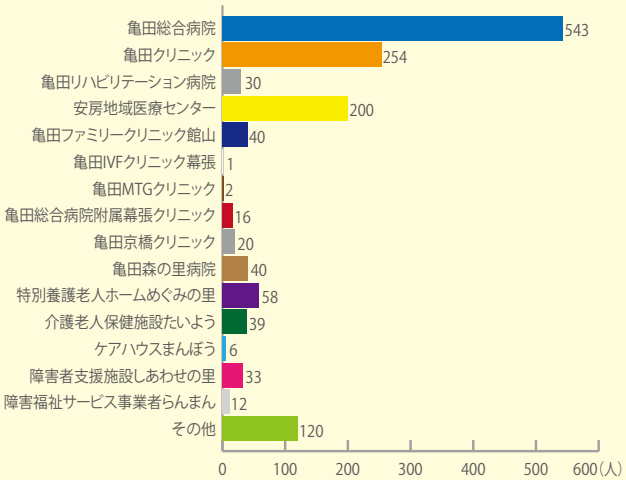
職員の主体性をサポートする

亀田総合病院　緩和ケア室
チャプレン　瀬良信勝

第1回の掲載では、COVID-19に関して実態や対応が十分に分からない時期に多職種連携を基に結成されたCOVID-19メンタルサポートチーム(COVID-19 Mental Support Team：通称COMST)の萌芽期の活動報告がありました。今回はその続編として、職員個々人の主体性をサポートするCOMSTの活動を中心に報告いたします。

折しも“GoToキャンペーン”が始まった2020年7月下旬、職員全体の思いを把握するため鉄蕉会と太陽会など関連事業所に所属する職員へ大規模なアンケートを実施しました。アンケート項目には「不安」について尋ねるに留まらず「不安解消のための試み」も併せて尋ねることに。個々人が不安な状況に対してただ受身なだけでなく、何かしらの対処を試みようとする積極的な存在だと気づくことがあるのではないか、との思いからでした。

アンケートには1,400人以上もの職員から回答がありました(回答者の内訳は下記グラフを参照)。



その結果からは、不安をもたらす根底に「未知の状況に対する理解の困難さ」と「適切な情報の伝達不足」が見出され、殊に対人関係に見られる疑心暗鬼は様々な歪みを生みかねないものとなっていることが分かりました。前回の掲載で示したようにCOMSTとしては心理教育を行ったり、適切な情報が伝わるように工夫したりした次第です。

新たな陽性感染者も日に3,000人を超し、「コロナ疲れ」といった言葉がすっかり定着するようになった2020年も歳の瀬、COMSTはそれまで感染拡大を起こさずに奮闘してきた職員達の努力をお互いに知ってもらう機会を作ろうと考えました。職員へのアンケートに際し「不安」だけでなく「不安解消のための試み」を尋ねたことにも表れていますが、COMSTは、個々の抱える不安や問題に対処する役割を担うのと同等かそれ以上に、職場内や職員間で行われるより積極的な活動や働きかけを応援する役割を大切にしていきたいと思っているからです。この時は「COVID-19対策インタビュー」と称し、4部署の管理者へインタビューを行い、それぞれが試行錯誤で頑張ってきた内容を全職員の目に触れるようにしました。

第1回は最前線であるCOVID-19患者病棟での様々な試み、殊にスタッフへの心身のケアを意識した試みについて。第2回は救命救急センターにおける日々更新し進化していく対策について。第3回は産婦人科での具体的な感染予防策のみならず、出産の不安や感染症の不安を抱えた妊婦やその家族に対して多職種で取り組んだ過程について。第4回には不特定多数の方が来院しかつ多くの職種が業務を行っている亀田クリニックでの、病棟とは異なった多くの難しい課題とその課題への対処について。それぞれの苦労と共にその経験から得られた肯定的な側面についても話をうかがいました。全てのインタビュー内容に共通して聞かれたことは、様々な工夫が特定の人によってなされたのではなく、関係するスタッフそれぞれが部署や職種の垣根を超え協力して改善に取り組んでいく姿でした。

2021年8月、オリンピック・パラリンピックが開催されると同時に、感染者数過去最高を更新し続ける第5波の只中にある現在、まだまだ先行きが見えない中で私たちは日々の生活を営んでいます。そのような状況の中、COMSTは個々人や職場の安心感が脅かされ破綻しないようにセーフティーネットとしての役割を担うと共に、自発的に困難を乗り越えようとする職員個々人の主体性を認めエンパワーメントできるよう引き続きサポートに努めていきます。

スタッフひろば

地域医療連携室
メンバーから

今回のご紹介内容
・氏名
①部署 / 職種
② Trick or Treat!
仮装するなら何？
③“どこでもドア”で
どこに行きたい??

蔵本 浩一
①診療部　疼痛･緩和
ケア科 医師
②ドアラ
③仁右衛門島

大川 薫
①診療部 在宅診療科、
地域医療支援部 医師
②つば九郎
③”大気圏外”から
地球を見たい！

草薙 洋
①診療部
消化器外科 医師
②ドラキュラ
③高校時代

宮地 康僚
①診療部
腫瘍内科 医師
②バーテンダー
③イースター島

渡邉 八重子
①看護管理部
看護師
②スケートボード
金メダリスト
③オーロラ観測
できるところ

杉田 登子
①地域医療連携室
看護師
②木の精
③世界遺産巡り

川上 由美
①看護管理部
看護師
②かぼちゃの提灯
③海外旅行

吉野 有美子
①総合相談室
看護師
②ニョロニョロ
(ムーミンの)
③源泉かけ流し
露天温泉

安室 修
①薬剤部
薬剤師
②チーバくん
③マッターホルン
の山頂

鎌田 喜子
①総合相談室
MSW
②Cat'sみたいな猫
③乗鞍高原・スイス・
アイスランド

児玉 照光
①総合相談室
MSW
②(太った)
ミッキーマウス
③上高地

大野 知代
①亀田医療大学
教授(助産師)
②ジャック･オ･ランタン
でコロナ撲滅の魔女
③第二の故郷ドイツへ

中村 雅代
①地域医療連携室　事務
②プリンセス
③スペイン・トルコ・フ
ランス

林 裕子
①地域医療連携室　事務
②魔女宅のキキ
③北海道小樽

黒川 亜純
①地域医療連携室　事務
②ジャック･スパロウ
③世界の博物館と
水族館

伊藤 博章
①地域医療連携室　事務
②カオナシ
(千と千尋の神隠し)
③深海･ヒマラヤの山頂

生稲 秋穂
①地域医療連携室　事務
②プーさん
③草津湯畑

大橋 洋子
①地域医療連携室　事務
②リトル･ミー
③サントリー二島

亀田総合病院スタッフの
マイブーム

「私のマイブーム」

「とても不思議だなあ」

野菜作りを始めてみて、感じたことは、そんなことでした。

ひょんなことから、畑を借りられることに。以前から、野菜作りをしてみたいと思っていたので、野菜を作り始めることに。

初めての野菜作り、下調べは入念に行いました。本を読み、インターネットで調べ、農家さんのお話を聞き、栽培の計画もしっかり練って、いざ栽培へ。土を作り、種をまき、野生動物への対策をして、準備は万端かと思われました。いきなり最初から成功するとは思っていませんでしたが、ある程度は育ってくれるだろうと期待しつつ、日々、雑草を抜き、水をやり続けました。

しかし、その期待は早々に打ち砕かれてしまいます。なんと、しっかりと世話をしたものが、ほとんど育たなかったのです。そもそも芽が出なかったり、途中で枯れてしまったり、鳥に食べられてしまったり、他の動物に食べられていたり…と。 一方で、ほったらかしにしていた野菜はグングン育つという不思議。育ちすぎて食べきれないくらいでした。また、虫に食われて一度枯れていた野菜が急に復活して、育ちだすこともありました。

植物を育てたことがある人からすると、当たり前のことなのかもしれませんが、植物を初めて育てる立場からすると、不思議なことの連続です。改めて考えると「不思議なこと」に出会う数が年々減ってきているなあと感じます。だから、たかだか野菜作りかもしれませんが、とても刺激的です。

ちなみに、実った野菜はスーパーで売っているものとは、似ても似つかぬものばかり。とはいえ、味はどれも格別で、全体的にワイルドな味がするものばかりでした。次は何を育てようかなと考える、今日この頃です。

週末農家（初心者）

勉強会・研修会スケジュール

勉強会・研修会開催　2021年度スケジュール

【2021年度研修会・講演会スケジュール】

2021年度がん看護実践コース研修

日程：1日目－ 2021年10月30日(土)
　　2日目－ 2021年11月6日(土)

時間：8:00 ～ 17:00

会場：亀田総合病院　B棟7階　看護研修室

定員：20名(院内10名、院外10名)

対象：がん看護経験年数2年目以上で、がん看護に興味のある看護師
　　両日出席可能でアンケートにご参加いただける方

締切：2021年10月22日(金)

＊同封のご案内・申込書をご参照ください

今回ご案内しております研修会ですが、COVID-19の感染状況により、延期・中止の可能性もございます。ご了承くださいますようお願いいたします。